

(別紙の2)

自己評価及び外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	運営理念や方針を開示し、利用者が安心安全な生活を送れるように努めている。四季折々の草花を手にするなど、身近な自然を日々の介護に取り入れ、また地域の祭りの際には神社に参拝するなど地域の行事に参加している。	開所当初に作られた理念が玄関や職員の目につく所に掲げられ、職員会の時などに職員全員で確認し合っています。	月ごとの目標を運営理念に沿ってたて、身近な目標達成を期待します。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	コロナ感染防止のため直接中学生との交流はしていないが、利用者が縫った雑巾を中学校に届けたり、地域の住民に、花壇で採れたチューリップの球根を包装してプレゼントするなどしている。畑の植え込み作業など、地区の方のボランティアを受けている。	地域の方の協力で、施設前の畑の管理やキノコのコマうち作業を行っています。野菜等の食材の差し入れもあります。12月にはサンタ隊の来所予定があるとの話がありました。施設側からは地域の方へ農作業用の「編みひもづくり」や「中学校へ雑巾のプレゼント」を行い、地域に恩返しをしています。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	日頃の、利用者と職員の様子をSNSに投稿したり、利用者が作成しただるまを地域の事業所に届けたりして、認知症の方の理解を深めていただいている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、その意見をサービス向上に活かしている。	運営推進会議では利用者の生活の様子や活動状況の報告、職員研修の取り組みなどを報告し、意見や運営に関しての助言などを頂き、サービスや職員の資質向上に活かしている。	家族、地区会長、民生委員、住民自治協議会代表、包括職員、協力医、鬼無里支所長と多方面の方の参加を得て、有意義な会議がもたれています。特に防災についての課題に対する助言が、記録に残されていました。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる。	包括支援センター職員に運営推進会議に参加していただき、事業所の運営や利用者や職員の活動について、毎回意見やアドバイス、指導、提案を頂いている。	住民自治協議会主導の「熟人(ネット)ワーク会議」に参加し、施設での小さな困りごとの相談や、支援を依頼できる関係ができています。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	職員会議では身体拘束についての研修を行い、理解を深めている。日ごろの介護の中で身体拘束に値する行為はないか確認している。玄関の施錠はせずに、自由に屋外に出られるようにしている。	現在身体拘束の方はいないが、職員会や運営推進会議で確認し合い、理解を深めています。スピーチロックについても職員一人ひとりが声掛けに気をつけて対応していました。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	虐待防止について職員研修や外部研修に参加して、虐待についての理解を深め、日頃の介護の中で虐待の場面がないかを確認し、虐待防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	権利擁護の研修を受け、理解を深めている。現在の利用者においては、日常生活で自立支援や成年後見制度を必要とする利用者はいないが、今後必要な方がいる場合は支援につなげていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	契約時には、契約書重要事項説明書に沿って、内容を確認しながら時間をかけて説明し、理解していただくようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	運営推進会議には、利用者や家族が運営推進委員として参加し、意見を述べている。施設入口に要望箱を設置している。また、職員は一人ひとり担当者を受け持って、家族と直接面談したり、電話連絡したりしながら要望や意見を聞いている。	日頃より管理者や担当職員と話す機会があり、意見を聞いています。玄関に意見箱を設置されていますが、現在のところ何も無いとのことでした。運営推進会議では、利用者家族全員出席で、公の場でも意見要望が伝えられています。家族の要望で玄関先ではなく、各部屋での面会実施が実現しました。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	定期的に行われる職員会議ケース検討では、所長や管理者、介護員で意見を交わしている。事業所所長が出席できない場合も必ず報告し、必要に応じて上層部につなげてもらっている。所長会議の報告を職員会議で行い、職員全体で運営状況の確認を行っている。	年1回、所長と職員が1対1で面接する機会を作っています。管理者とは日々のケアの相談や職員会議等で意見を伝えていきます。最近では予算外で屋根の修理を可能にしたとの話がありました。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	年1回所長面談があり、意見を聞くことができています。日頃より職員の勤務状況を所長に報告し、労働条件が整うようにアドバイスを行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	資質の向上や介護技術の向上などの研修に、参加する機会を設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	同法人の会議にて意見を交換したり、鬼無里事業所セクション会議で、各事業所の状況報告や課題解決に向けての検討を行ったりしている。SNSでの広報活動を行い、各事業所の活動を参考に、質の向上を図っている。他事業所と合同で研修に参加している。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	職員一人ひとりが声掛けする機会を多く持ち、本人の生い立ちや生活歴を聞き取り、会話の中から困っていること等、できるだけ多く出していただけるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	生活歴や本人を取り巻く環境、人間関係を家族から聞き取り、サービス導入時の不安や困っていることを、自然体で話せるような雰囲気づくりをして、よい関係を築くようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	アセスメント段階では、まず本人や家族の思いを聞き取り、以前利用していた担当ケアマネ、サービス担当者、主治医と連携を取り、必要なサービスについて検討するように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	本人に残されている力を発揮し、出来そうな作業を本人のペースで出来るように、仕事を選んでもらいながら、職員と共に行っている。食事の際には下ごしらえ、テーブル拭き等、出来ることを行ってもらい一緒に食事をしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	利用者の状況をこまめに連絡し、支援の方向性や支援に対する思いなどを聞いている。自宅で過ごしていたときに穏やかに過ごせるよう、家族に必要な物品や居室環境を整えてもらっている。必要な受診の付き添いをしてもらっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	地域の情報番組を見たり広報誌を見てもらい、馴染みの場所や人間関係を聞き取っている。コロナ感染防止をしながらご家族の了承を得て、親戚や自宅近所の方と面会をしている。電話での取り次ぎも行っている。	コロナ禍の為、玄関先ではあるが家族や近所の方との面会を実施したり、専門医の受診時、家族と自宅付近をドライブするなど馴染みの関係継続に努めています。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	対面での座席にすることで、お互いの顔を見ながら会話ができるようにしている。職員が間に入り、作業やレクリエーションが楽しくできるようにして、利用者同士が家族のように、お互いが分かり合え支え合えるように支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	退所理由によっては断ち切れになってしまう方もあるが、本人家族が安心して生活できるよう、必要な情報提供や相談支援を行うよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	本人と関わりを深める中で、希望や意向の把握をし、利用者本位を尊重している。本人の意向確認ができない時は、場面場面の行動や表情を確認し、本人の意向をくみ取るようにしている。	入浴時や利用者同士の会話の中から意向を拾い出し、実際に鬼無里の風習に則って、ぼたもちを作ったとの話が聞けました。また把握が難しい利用者については表情や仕草で意向を探っています。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	本人との会話や家族との面談の際に、改めて生活歴や嗜好などを聞き取り、入所前の生活を知り、施設での生活に取り入れ支援できるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	集団での1日の生活の流れはあるが、一人ひとりの生活のペースに合わせて、その時々に合わせて支援を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	毎月行うケース検討会では、各利用者の担当者から状況報告があり、全職員で意見を交わして支援の方向性を出し、介護計画に活かしている。家族が担当者会議に出席できない場合は、電話連絡で意向の確認を行っている。	月1回利用者全員の様子を、各担当が医療関係者からの情報や家族、利用者の意向を踏まえながら報告し、ケアの方向を職員全員で検討した上で、介護計画を制作していません。会議に出席できない職員にも事前に意見を求めて、詳細な会議録を作成し、全員で共有しています。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	個々の目標を記載した記録用紙があり、目標に対するケアや本人の様子などを記入し、朝夕の申し送り時には詳しく情報伝達し、より良いケアに努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	診療所の往診、外出時の移動支援、緊急時の支援等、個々の状況に応じて対応している。緊急時は法人の車両で、受診の付き添いを行うこともある。車いすの方は、法人の車いす対応の体重計で、体重測定を行うこともある。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	地域住民のボランティアを受け、屋外作業を行ったり、地域の方から地域で採れた野菜など食材の提供を受けている。紐編み作業で作った紐を、お礼にお渡しすることもある。地域の祭りに参加し、必要な物品をお貸しするなど地域とのつながりを持っている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	地元診療所医師による2か月に1回の往診の他、急な体調の変化には、看護師に相談して指示を仰いでいる。夜間でも直接医師と相談できることもある。心配な症状がある場合は、専門医や総合病院に紹介してもらい、適切な医療を受けられるようにしている。	入所時にかかりつけ医の確認を行い、現在は全員、協力医である地元診療所医師が主治医となっています。2か月に1度の往診時に利用者の体調の詳細な様子を医師に伝え、適切な医療の提供を行っています。専門医の受診は家族対応で行い、施設から利用者の状態を報告するなど、連携がとれています。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	地元診療所看護師に、急な体調の変化について相談している。社協内の看護師やPT(理学療法士)・OT(作業療法士)に日ごろの様子を相談し、適切な医療を受けられるようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は病院のCW(ケースワーカー)に日ごろの生活の様子や本人の情報を送り、病院での様子を家族やCW、病棟看護師と連絡を取り、退院に向けての情報交換を行い、可能な限り、グループホームでの生活の継続ができるように支援している。必要時は病院に訪問し医師看護師CWと話をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	重度化や終末期には十分な医療が受けられないことを入所契約時に説明し、本人家族の意向の確認を行っている。重度化や終末期には家族医師職員間で話し合いを持ち、方向性を決め、必要な場合は、医師から高齢者の身体機能についてや終末期の心構えなど話をしてもらっている。希望によっては看取りを行っている。	重度化や終末期のケアについては、入所時看取りの指針を説明し、納得いただいています。看取ったケースについては、医療と連携を取りながら、家族の揺れ動く思いに丁寧に寄り添い、施設でできること、できないことを(入浴介助 医療行為等)、その都度話をし、状態によっては直接主治医から家族への説明を行っています。また特養への入所を勧めるケースもあります。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	職員は常日頃から、普通救命救急法の講習会を受けたり、緊急時のマニュアルを確認している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	地域と協定を結び、年2回避難訓練を実施している。地域住民の応援参加の協力体制を作っている。緊急非常時の食料を備え、停電時の発電装置の始動の訓練などを行っている。	コロナ禍で地域の避難訓練には直接参加は出来なかったが、人数把握での参加はできました。施設独自では、近所の方、区長、消防団の3名の地域の方の参加で、昼想定での避難訓練を行いました。地域の方には、外に出た利用者の避難場所への誘導を依頼しました。非常食や停電時備品等確認できました。	夜間想定、冬季の積雪時想定での避難訓練の実施と、非常時の地区の方への伝達方法の整備等を期待します。

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	利用者の生活歴や人格を尊重し、プライバシーを損なわないよう、職員は意識して言葉かけに気を配り、ケアに当たっている。ケース検討会では個々の対応について話し合いを行い、個人情報保護の研修、服務規程等の確認をして、日ごろから意識を高めている。	トイレに誘う時の声掛けや、入浴時の露出を少なくする等、気を配っています。会話では方言を使いながら節度のある言葉使いを心がけています。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	日常生活支援については、本人の希望や意向を尊重し、同意を得てから実施している。自己表現や自己決定が困難な状況の時には、本人の表情を確認するなど働きかけの工夫をしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	日々のレクリエーションや作業など担当職員の計画があり、提案を行ってはいるが、本人の希望をお聞きし希望に沿って支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	定期的に理美容の支援を行っている。起床後の洗面時は本人が髪を整えられるよう、声掛けやブラシを渡すなどの支援を行っている。男性利用者は毎日髭剃りができるように支援をしている。季節を考慮し、着心地の良い服を職員と一緒に選んだり、アドバイスをしたりしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている。	献立は利用者の意見を取り入れながら担当職員が立て、職員と利用者が一緒に準備を行っている。個々の好みや能力に応じ、出来る作業に参加し、食事を楽しみな時間に行っている。季節や行事に合わせた献立を取り入れ、外注の食事の提供も行っている。	庭の畑の作物や地域の方からの季節の山菜等の差し入れ(蕨 ゼンマイ ごみ フキ等)があります。利用者が下ごしらえをして食卓にのせ、季節を味わったり、利用者職員皆で白瓜の漬物を作ったりと、利用者の参加する機会が多く、作る楽しみもあります。カレーも下ごしらえから調理まで、利用者が参加して作ったとの話が聞けました。テーブルやトレイ拭き等の片付けの参加もしています。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	食事量や水分摂取量を毎日記録し、観察考察している。個々の身体状況によって飲み込み状況を考慮し、軟らかく調理したり刻んだりして、必要量が取れるようにしている。夏場はスポーツドリンクを飲んで頂き、十分な水分を摂れるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	毎食後、出来るだけ本人の力で口腔ケアを行ってもらっているが、見守りながら必要時は介助し、確実に口腔内の清潔を保つようにしている。毎週2回義歯洗浄剤を使用して消毒を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	各自の排泄水分摂取量の把握を行い、必要に応じて声掛けをしている。夜間の排泄に関しては、状態により良眠中は適宜行っている。	一人ひとりの排泄パターンを把握し、入所時より失禁回数が減ったり、利用者自身でパットの交換ができるようになったなど、改善の具体例を聞くことができました。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	1日の食事量や水分量を把握し、排便の把握をしている。食事に野菜をたくさん取り入れ、乳製品を毎日摂取するなど、排便しやすい食事の提供を行っている。必要に応じて排便を促す薬を使用し、排便の管理を行っている。車いすの方も訴えや表情を見て排便を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている。	体調と本人の希望を確認したうえで、入浴してもらっている。バイタルや本人の訴えを基準に行っている。本人の気が進まない時は、時間を変えたり曜日を変えたりしながら、意向に沿って入浴できるよう配慮している。	家庭風呂の作りのため、湯船に入りづらい時は2名介助にしたり、シャワー浴で対応したりする時もあります。週2回を目安に入浴の提供をしています。入浴を嫌がる利用者には、日程や職員を変えるなどして対応しています。今後、季節風呂の提供を考えていくとの話がありました。入浴時の会話を楽めるよう工夫しています。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	利用者個々の生活リズムを把握し、休息ができるように努めている。日中レクリエーションや作業を行うことで、適度な運動や疲労感から安眠できるように努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	職員は服薬の目的や内容を理解している。薬の変更時や単発の処方については、ミーティングで情報共有し、状態の変化を把握して医師に報告相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	日常生活の中で本人が興味のあること、できることの把握を行い、入所前から続けてきたことなどが続けられ、楽しみな時間を持つたり役割として行えるよう支援している。野菜の収穫、食堂の掃除、洗濯物たたみ、調理の下ごしらえなど、個々の能力や興味に合わせて支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している。	法人のマイクロバスで花見に出かけている。コロナ感染防止のため、ほとんど外出の支援ができなかったが、日頃より屋外に出て日光浴や運動を行っていた。地域のボランティアの支援を受け、野菜の植え付けを行い、利用者に収穫をしてもらっていた。	春には奥裾花へ花見ドライブに出かけたり、天気の良い日には散歩に出かけ、近所の方と挨拶をかわしたり、玄関先で外気浴やお茶会を楽しんでいます。	地区の移送サービスを利用し、家族や地域のボランティアの助けを受けながら、気軽に外出できる仕組みを作りたいことを期待しています。

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	本人のお小遣いとして預り金を預かっている。利用者によっては居室で本人が管理している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	家族からの電話を取り次いだり、電話を掛けたい希望のある時には対応したりしている。携帯電話を使用し、居室で自由に電話したり電話を受けている方もある。家族に季節の手紙を送る支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	居室の居間スペースや廊下には、利用者と職員と一緒に、観葉植物や花などで壁面を飾り、季節感を味わいながら穏やかに過ごすことができるようにしている。日中はすりガラスを開け、日が差し込むようにして、屋外の様子を見られるようにしている。居室や食堂にエアコンの設置をして、快適な温度環境で過ごすことができるようにしている。	共有スペースと台所がワンフロアになっており、食事を作る職員の様子やにおい、音がわかり、家庭にいるような雰囲気になっています。畳のスペースや、庭が見られるゆったりと座れるソファが設置されていました。廊下や壁には、季節の飾り物や利用者の日常の写真が、所狭しと飾られています。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	共有スペースにはソファやテーブルを置き、利用者間で談笑したり、一人で静かに過ごすことができるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	居室では、使い慣れた家具や電化製品を使用することで安心し、気持ちよく過ごせるようにしている。家族や本人の写真、製作品などを置き、個性ある空間をつくっている。必要に応じてベッドの使用や手すりの設置を行い、安心して過ごすことができるようにしている。	大きめな収納があり、すっきりとした部屋になっています。馴染みの家具や家族の写真、職員作成の壁画、利用者の作品、位牌等馴染みのものに囲まれて、安心して過ごせる空間となっています。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	居室入口には名前プレートがあり、本人が自分の名前を確認できるようにしている。施設のところどころに案内表示をして、不安や混乱を防ぐようにしている。持ち物には記名をし、扱いやすいようにしている。		